

『遐邇貫珍』と幕末に伝えられた太平天国情報

松浦 章

1 緒言

1853年から1856年にかけて香港で刊行された中国語の月刊誌『遐邇貫珍』は、その誌面のかなりの部分に、欧州において形成されていた近代的な科学知識や科学技術などの記事を掲載していた。換言すれば近代的欧州の啓蒙思想の漢字文化圏への伝搬としての大きな役割を持っていたとも言える。¹その上『遐邇貫珍』の各号に掲載された「近日雑報」は、香港を中心とした東アジア世界のみならず世界の情報を掲載するある種の新聞としての役割も担っていたと言えるのである。²特に幕末の日本において一部の知識人にはあつたが、『遐邇貫珍』の本文の記事や「近日雑報」に掲載されたニュースに強い関心が持たれていた。³このことは、内田慶市氏と沈国威氏と共に編集した『遐邇貫珍の研究』⁴の中においても紹介したが、『遐邇貫珍』の伝えた「近日雑報」にはさらに興味深い内容を含んでいる。⁵

『遐邇貫珍の研究』刊行後さらに、幕末日本における『遐邇貫珍』受容に関する記述を見いだすことができ、『遐邇貫珍』によって日本に伝えられた太平天国の乱に関する情報と、長崎へ来航した中国貿易船の太平天国情報の伝達状況とについて述べてみたい。

2 『遐邇貫珍』「近日雑報」の日本への影響

昭和25年(1950)度新聞学術講演筆記として『新聞研究』に掲載された東京大学新聞研究

¹ 沈国威「『遐邇貫珍』解題」、松浦章、内田慶市、沈国威共編著『遐邇貫珍の研究』関西大学出版部、2004年01月20日、91～128頁参照。

² 松浦章「『遐邇貫珍』の描く近代東アジア世界」、『遐邇貫珍の研究』13～62頁。

³ 松浦章「『遐邇貫珍』の描く近代東アジア世界」、『遐邇貫珍の研究』14～15頁。

⁴ 『遐邇貫珍の研究』720頁。

⁵ 松浦章「『遐邇貫珍』の描く近代東アジア世界」(『遐邇貫珍の研究』13～62頁)のなかで『遐邇貫珍』の毎号に掲載された「近日雑報」というニュースを取上げたが、その「近日雑報」はまだまだ多くの内容を含んでいる。

所所長であった小野秀雄氏の「遐邇貫珍について」⁶がある。小野氏の「遐邇貫珍について」は講演記録で短文ではあるが、極めて示唆に富むものであるため、特に『遐邇貫珍』に関する部分について以下掲げてみたい。

ここに掲げた「遐邇貫珍」というパンフレット様の印刷物は、中国で出た雑誌まがいの新聞である。(中略)「遐邇貫珍」は日本では既に幕末の文献に出ている。喜多村信節の書いた「ききのまにまに」……これは天明元年から嘉永六年にいたる七十三年間の記事を集めたものであるが、その嘉永六年八月晦日のところに、「長崎鎮臺より官府に告ぐ」と書いた報告の中に「唐山香港の風説書遐邇貫珍にいわく」云々とある。唐山とは中国という意味で、その時分には新聞のことを「風説」といつていたのである。その次の文献は古賀茶溪の「西使續記」で、安政三年十二月十日(一八五四年)の條に、箕作、宇田川という二人の醫者が玉泉寺の通譯を命ぜられていたが、そのときに麻夷といふ白人の通譯から、英佛二萬の兵がクリミヤ半島に上陸したことを聞いた。果せるかな彼は「遐邇貫珍」を持つていたと書いてある。これが日本にある一番古い文献である。

「遐邇貫珍」の實物は私も断片的に持つているが、私が初めて見た最大の集積は、平山成信氏のとブリティッシュ・ミュージヤムの集積である。また最近島津家の蔵書のなかにそれがあって、東大の史料編纂所が保管していることを聞いた。まだ實物を見ないが是非見たいと思つている。⁷

と言う小野秀雄の『遐邇貫珍』に関する説明は、短文であるがブリティッシュ・ミュージヤムのコレクションも見ただけに極めて正確であった。ブリティッシュ・ミュージヤムの『遐邇貫珍』とは現在大英図書館に所蔵されるものと思われる。大英図書館の『遐邇貫珍』の所蔵状況については、沈国威氏の『『遐邇貫珍』解題』に詳しい。⁸

その中で小野氏は『遐邇貫珍』が日本で引用された古い例として、喜多村信節の「ききのまにまに」と古賀茶溪の「西使續記」をあげられているものの、その内容まで検討されていない。そこで確認できた喜多村信節の「ききのまにまに」について、『遐邇貫珍』を引用した部分について触れてみたい。

⁶ 小野秀雄「遐邇貫珍について」『新聞研究』第13号、日本新聞協会、1951年2月、6～7頁。

松浦章「序説：『遐邇貫珍』の世界」(『遐邇貫珍の研究』2頁)において、我が国での『遐邇貫珍』に関する最初の研究として石田八洲雄氏の「『遐邇貫珍』に現れたミルトンの詩に就いて」(福岡工業大学『文科論集』第1集、1966年7月)を掲げたが、小野秀雄氏の成果は短文であるが石田氏の成果より15年前のものであることを付記したい。

⁷ 小野秀雄「遐邇貫珍について」6頁。

⁸ 沈国威「『遐邇貫珍』解題」、『遐邇貫珍の研究』93頁。

喜多村信節の『ききのまにまに』は、三田村鳶魚校訂『未刊隨筆百種』に収録されている。その『未刊隨筆百種』第十一の解題に「ききのまにまに」について「此の書四冊は筠庭喜多村信節の手録にして、天明元年より嘉永六年に至る、八元七十三年間の記事なり」⁹とあるように、小野氏が指摘した「ききのまにまに」の嘉永六年八月晦日の箇所とされるが、『未刊隨筆百種』では三月晦日の條である。以下に全文を引用してみたい。

喜多村信節『ききのまにまに』の嘉永六年三月晦日（1853年5月7日）条に次のようにある。

今月長崎鎮臺より官府二告ぐ、今茲癸丑清咸豐三年道光三十年にて、新帝立、改元有、二月先明朱氏之裔、年僅二十有四、有興復先朝之志、不用清年號、皆從明律、年改天德、舉兵廣東府、其軍三十餘萬、勢強大衆、推爲朱新王、咸豐天子雖親征戰、不利云々。又來舶人書、新王在廣西、朱姓年號天德三年、湖西省湖北省并廣東作師、現在漢中府亦屬、廣三省人改作大明朝髮、全髮大領大袖云。風説に八天徳王、英吉利と合體して清を攻るなどといふ。唐山香港の風説書遐邇貫珍にいはく、上海火輪郵船來信、北路兵信云々、九月初四日至、蘆城傷兵萬人、而長髮黨衆死者五六百人、逃逸者二千人など見へたり、蘭人探報唐國の一件甚深く、南京及鎮江等八既に一揆の手二入候。南京八大凡破壊二逢候。廈門ハ三千人の一揆の者より既に取られ申候。昨丑年六月、唐帝の船勢と一揆と大合戦有之。此時一揆ハ散々敗北二及候。され共其都府唐國の方二戻り候迄二ハ至らず、一揆人数六萬より八萬二及、一揆漸々河南地南陽府及徽州府等の諸府既に手に入り申候。エケレス近板の説二ハ、當時迄の唐主親族に至る迄、位を放れ候の説ハ、先實説の様に有之候由。北京ハ一揆より圍れ候、さて上海の義は運上會所迄一揆に打潰され候程の事也。近ごろ唐國の説には廈門の地ハ國帝方二て、一揆七千人打取られ候よし。¹⁰

とある。さらに『ききのまにまに』によれば、嘉永六年六月晦日の條にも『遐邇貫珍』から引用された記事が見られる。そこでこの部分も次に掲げてみたい。

○六月晦日条（1853年8月4日）

當月對馬家より清朝の亂劇を注進有。其狀二云。此程朝鮮國より譯官使共より通辦役之者迄申越候。近來中國方之騷動甚しく、其機會は一昨年頃より之事二て、最初ハ盜賊一揆之様子も相聞候處、段々強大二相成、其根元ハ明代之餘類所々民間二相殘居候處、今度先代の回復を名に致し、岳州衡州等之邊二起立候由二御座候、一彼國昨今之巷説二て、右之騷亂主謀ハ洪姓二て、徒黨皆中國人之由、清朝仕來之薙髮を禁じ、明朝の舊制に復

⁹ 三田村鳶魚校訂『未刊隨筆百種』第十一、東京・米山堂、1928年2月、解題1頁。

¹⁰ 三田村鳶魚校訂『未刊隨筆百種』第十一、291～292頁。

候由、尤一揆之至る所、貨財婦女を不犯掠、依之向ふ所庶民安堵して悉く服従し、道州岳州次第に被奪、武昌九江安寧之諸鎮引續き陥没す。清の軍兵死傷多く候由。且北京も最初無油断、吉林遼東口東之官兵を發し、其他諸方軍兵を催促し、使者無絶間、庶民困窮、財用乏敷、兵糧難續、仍て富戸の銀錢を無理に取集候様二相成候二付、又一説には蘇州も陥候由。是等八全く竹竿之争鬪より起候由。即今之様子二ては次第に滋蔓之勢二可及候。騒動不一形事と噂仕候由二御座候。右之趣朝鮮國二差置候役人共傳聞に任せ申越候間、實否難計候得共、彼筋異變之説二付、乍恐風説之儘奉添候。御内聴二候。自然行違之儀も可在御座哉。其段幾重二も被爲含、御宥免被成下候様奉願候以上。六月、宗對馬守家來古川將監、佐須伊織

唐山香港風説書遐邇貫珍云。上海火輪郵船來信、北路兵信云々、九月初四日至、蕪城傷官兵萬人、而長髮黨衆死者五六百人、逃逸者二千人杯見へたり。又同書、俄羅斯國師船、夏間由港前、赴日本國等處、茲已於上月、返抵上海據云。日本現遭大喪、其國主逝、北亞墨利加地、北氷海一帶歴來。

此頃京都二て有功卿、いく千たびもろこし人のよするとも大和島ねハ動くべきかは、拙風、太草船さやぐえミしによせくともなにゆるかめや浦安の國、[頭書]主謀洪姓と云ハ天徳が事か、然らば他の説と異也。此にて風説するハ清商杯の咄にや、しらざれ共、廣西省潯陽府高來縣人朱華字玄嘩と云。石炭の商人也。兵を起して天徳王と號すといへり。

11

とある。

それでは、喜多村信節が『ききのまにまに』に引用した『遐邇貫珍』の部分と『遐邇貫珍』の原文と照合してみたい。『ききのまにまに』の三月晦日の記述は、『遐邇貫珍』1853年第5号、11丁表、「近日雜報」の次の記事と一致するであろう。下線部がその引用部分である。

上海火輪郵船來信云、北路兵信、於九月初四日、已行抵正定府、蕪城縣等處、距京師計六百餘里之遙、按地理圖考之、約於五個禮拜、行一千二百餘里、始則七月二十九日、在河南懷慶府北行、旋回爲官兵追躡。八月初二日、入山西界經垣曲縣破其城、遂趨平陽縣、洪洞縣勝保帶兵隨後緊逐、乃入直隸界趨臨洛關抵欒城。九月初四日、至蕪城傷官兵萬人、而長髮黨衆、死者五六百人、逃逸者二千人、自蕪城交仗後、逕趨正定府、此係由北邊抄録來之信息、未知的確情形究屬如何。聞現下京師戒嚴、朝廷勅諭滿蒙漢各員弁兵丁、竭力剿禦、勅賜親王綿愉格林沁等、上方劍、督飭將士、嚴守京城。¹²

¹¹ 三田村鳶魚校訂『未刊隨筆百種』第十一、311～312頁。

¹² 『遐邇貫珍の研究』676(43)頁。

また『ききのまにまに』の六月晦日の記述は、上記の採録と次の『遐邇貫珍』1854年第1号、10丁裏～11丁表、「近日雑報」の記事と一致するであろう。次の下線部もその引用部分である。

前第一號篇内、俄羅斯國師船、夏間由港前赴日本國等處、茲已於上月返抵上海、據云、日本現遭大喪、其國主殂逝。

北亞美理駕地、北冰海一帶、歷來英國派船至彼探覓新地途徑、…¹³

とある。これら喜多村信節が『ききのまにまに』の三月、六月晦日条に二度も抽出した『遐邇貫珍』の記事は、中国で発生していた太平天国の乱に関する記事であった。喜多村信節は、『遐邇貫珍』からの抜粋として書名のみを記したが、具体的な『遐邇貫珍』の掲載号を記していなかった。しかし上記の引用の状況から、その出典は、『遐邇貫珍』1853年第5号に掲載された「近日雑報」と、『遐邇貫珍』1854年第1号の「近日雑報」からの抜粋であったことは明かである。

3 幕末日本に伝えられた太平天国の乱に関する情報

幕末日本に伝えられた太平天国の乱に関する情報について増井経夫氏、市古宙三氏¹⁴等の成果がありほぼ大要が知られる。特に市古宙三氏の研究は、幕末期に日本で収集された太平天国に関する様々な情報を分析した詳細な研究であり、その中にも『遐邇貫珍』二冊が那覇に来航したペリー一行から贈られ、さらに琉球へ出張中の薩摩藩士へ、そして薩摩藩主から太平天国の情報とともに老中へ『遐邇貫珍』が届けられたとされている。¹⁵市古宙三氏が、『遐邇貫珍』の記事で太平天国に関する情報として注目されたのは「西興括論」である。¹⁶この「西興括論」こそ『遐邇貫珍』創刊号、即ち1853年8月1日第1号の4丁表から7丁表にかけて掲載されている。¹⁷しかし、市古氏は『遐邇貫珍』の現物で確認されたものではなく『太平天国史料』に収録された「遐邇貫珍所載太平天国史料」によって述べられているのである。¹⁸『太平天国

¹³ 『遐邇貫珍の研究』670(49)～669(50)頁。

¹⁴ 増井経夫「太平天国に対する日本人の知識」『中国の二つの悲劇 アヘン戦争と太平天国』研文出版、1978年6月、74～98頁。

市古宙三「幕末日本人の太平天国に関する知識」『近代中国の政治と社会』東京大学出版会、1971年10月、93～131頁。

¹⁵ 市古宙三「幕末日本人の太平天国に関する知識」『近代中国の政治と社会』108～109頁。

¹⁶ 市古宙三「幕末日本人の太平天国に関する知識」『近代中国の政治と社会』108頁。

¹⁷ 『遐邇貫珍の研究』714(5)～712(7)頁。

¹⁸ 市古宙三「幕末日本人の太平天国に関する知識」『近代中国の政治と社会』115頁、注(22)。

史料』には『遐邇貫珍』から収録された状況については『遐邇貫珍の研究』で触れた。¹⁹

そこで市古氏が触れられなかった喜多村信節の『ききのまにまに』引用された『遐邇貫珍』の原文の掲載号を上節において確認したが、さらに太平天国に関する情報の入手先の一が、長崎へ来航した中国貿易船からであり、それらが何時日本に伝えたかについて検討してみたい。

喜多村信節『ききのまにまに』の嘉永六年晦日の条に、

○六月晦日条（1853年8月4日）

當月對馬家より清朝の亂劇を注進有。其狀ニ云。此程朝鮮國より譯官使共より通辦役之者迄申越候。近來中國方之騒動甚しく、其機會は一昨年頃より之事ニテ、最初ハ盜賊一揆の様子も相聞候處、段々強大ニ相成、其根元ハ明代之餘類所々民間ニ相殘居候。

として記した記述の典拠として参考になるのが『大日本古文書 幕末外國關係文書之一』に収録された「六月對馬國府中宗對馬守義和家來届 老中へ清國騒亂の件」である。同文書には「町奉行書類ヲ以テ本文トシ、聞集録ニヨリテ傍註ス」とあり、「嘉永六年丑六月對州侯より御用番へ御届書」として次のように記される。

此程於朝鮮國譯官之内より通辦候者迄及内話候は、近年中國筋騒亂甚敷、尤一昨年頃より之事ニテ、最初は盜賊一揆之様子ニ相聞候處、段々騒大ニ相成、其根元は、明代之餘類所々民間に相殘居處、今度先代之恢復を名といたし、岳州衡州等之邊より起り立候由ニ御座候。

一彼國昨今之巷説には、右之騒亂主將は、洪姓にて、徒黨皆中國人之由、清朝仕來候辮髮を禁し、明朝之舊制ニ復し候。…²⁰

とある。この箇所は嘉永六年に編纂された『海防續彙議』巻七にも収録され、「清國騒亂話」としてその最初に掲げられている。

此節朝鮮國譯官内より通辦の者迄及内話候は、近年中國筋騒亂甚敷、尤一昨年頃より之事にて、最初は盜賊一揆之様子に相聞候處、段々長大に相成候。其根元は、明代之餘類、所々民間に相殘居候所、今般先代之恢復を名と致し、岳州衡州等之邊より起り立候由に御座候。彼國昨今之巷説には、右の主謀は洪姓にて、徒黨皆中國人の由、清朝仕來の辮髮を禁し、明朝之舊制に復し候由。…²¹

とあり、若干の文字の移動があるが、ほぼ同文である。これに続くのが『大日本古文書 幕末外國關係文書之二』に収録される嘉永六年十一月の「對馬國府中城主宗對馬守義和届 老中へ

¹⁹ 『遐邇貫珍の研究』47～50頁。

²⁰ 『大日本古文書 幕末外國關係文書之一』東京大学出版会、1985年2月、覆刻再刊、433頁。

²¹ 住田正一編『日本海防史料叢書』第三巻、クレス出版、1989年7月、「海防續彙議」89頁。

清國騒亂の件」であり、「阿部伊勢守殿へ差出候封書寫」として次の文が掲げられている。

於朝鮮北京筋之様子捜考之趣

朝鮮和官門内之番人は、對州之者より相勤、門外之番人は、釜山城之軍官より相勤候儀
二御座候處、通辯爲稽古彼地へ被候者、右門番軍官へ出會仕雜話之折柄、北京筋騒亂之
様子何心なく相尋候處、帝城之近邊にて相圍、…²²

とあり、これは対馬宗家が朝鮮国から得た情報として徳川幕府に届けた内容であった。宗家は、朝鮮国が北京で得た情報、あるいは宗家の使者が朝鮮国で得た情報とを幕府に伝えている。

他方、長崎からのルートも存在した。嘉永七年二月には、中国から長崎に来航した貿易船の船主で長崎在留中の江星奮と楊少棠が次のことを長崎奉行に伝えた。

唐山風聞、有叛民逆匪騷擾江西之説、刻下誠恐勢熾、延及江南、則蘇省亦乱、致使阻撓、
思念及此。²³

とあるように、太平天国の勢力は江西を騷擾し、さらに江南そして蘇州までも波及していることを伝えた。

長崎に来航した中国からの貿易船が、長崎において中国事情を伝えていたが、この嘉永七年二月における中国の貿易船主が、長崎奉行に伝えた事情についてここで触れてみたい。

嘉永七年二月以前に中国からの貿易船が長崎に入港したのは、嘉永五年十二月二十二日（1853年1月31日）に長崎に入港した船主在留江星奮と脇船主鈕春杉の子五番船であって、それに次ぐのが嘉永七年安永元年七月二十六日（1854年8月19日）に入港した在留船主楊少棠、財福陶梅江の寅一番船であった。²⁴つまりこの間1年7箇月の間は入港船がなかったのである。それが何故長崎在留唐船主の江星奮と楊少棠が、中国事情を伝えたのであろうか。彼等は、

昨夏又々欠船仕、空く一季待暮し候二付、多分冬船は急度仕出相渡可申と存し、…貴國之御船を拝借仕、安否問合之為、唐國へ罷越、²⁵

と、入港船の無いことに苦慮して、日本船を借り受け帰国して本国の事情を調べようとしていたのであった。その願書のなかにおいて中国事情を述べたもので、その情報は一年以上前のもので新鮮なものではなかったと言える。

²² 『大日本古文書 幕末外國關係文書之二』東京帝国大学、1910年9月、279頁。

²³ 『大日本古文書 幕末外國關係文書之五』東京帝国大学、1914年3月、補遺、1頁。和訳は同書、378～380頁に見える。

²⁴ 大庭脩編著『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』関西大学東西学術研究所、1974年3月、17頁。

²⁵ 『大日本古文書 幕末外國關係文書之五』379～380頁、補遺、1頁。

『大日本古文書 幕末外國關係文書之三』に収録される安政元年三月の「對馬國府中對馬守 義和家來届 老中へ 清國騒亂の件」によれば、

去年正月、朝鮮國全羅道全州と申所へ罷越候朝鮮人舊冬罷歸、同所にて北京筋へ爲商賣罷越候者より承候趣を以、館内之者より及内談候は、北京之兵乱模様八九分通は明軍に攻取られ、今程清國帝及籠城候處、寧古塔よりも軍勢を催、明兵を喰留、其後双方を不致、互に相守候處、明兵に兵糧の道を斷切られ、北京浮沈之場にて、朝鮮へ兵糧を乞候由に御座候。…²⁶

とある。これも對馬の宗家から幕府へ伝えられた情報であった。

このような太平天国の情報が逐一伝えられる中で幕府は、傍観していたわけではない。『大日本古文書 幕末外國關係文書之六』収録の安政元年六月三日付の「老中達 長崎奉行へ 清國騒亂の件」として「六月三日、伊勢守殿御渡」として、

長崎奉行へ

清國之亂彌甚敷、清帝北京二籠城之處、糧道を被斷切、窘迫之様子二候旨、當地二おいて専風聞有之候、右は當節如何様之模様二候哉、相分候儀二候ハハ、風聞相糺、委細申聞候様いたし渡候事。²⁷

とある。伊勢守とは備後福山藩主で時に老中であった阿部正弘のことである。彼が老中として長崎奉行に太平天国の動静に関する情報収集を命じたのであった。長崎奉行に命令した理由は長崎に来航する中国船からの新鮮な情報を得るためであったことに他ならない。

その効果は直ちに現れた。『大日本古文書 幕末外國關係文書之七』所収の安政元年の「閏七月 唐船主書翰 長崎奉行へ 清國騒亂の件」がそれに当る。嘉永七年寅閏七月付で、先の中国からの貿易船船主の江星奮と楊少棠との両名による書簡が届けられたのである。その書簡は次の記述で始まる。

蒙諭目下唐山擾亂情景逐一報 聞等、因俱已知悉、原自道光三十年間勢甚熾猛、係廣西廣東無賴賊黨無端烏合、喚洪秀全、楊秀清者兩名立爲謀主、同類日增一日、脅從之者不爲不多、或二三千人、或四五人、…若輩俱皆留髮、以紅色布裏頭、故官兵叫作紅巾賊、又叫長髮賊也。於昨二三月間、江南內揚州鎮江南京三處賊勢更多、約四五萬人、三處城池俱已奪占、該地官員盡節者豈堪計數、…²⁸

とあり、さらに中国側の荷主からも書簡が長崎来航の船主を通じて届けられたことは『大日本

²⁶ 『大日本古文書 幕末外國關係文書之三』東京帝国大学、1911年7月、655頁。

²⁷ 『大日本古文書 幕末外國關係文書之六』東京帝国大学、1914年10月、435頁。

²⁸ 『大日本古文書 幕末外國關係文書之七』東京帝国大学、1915年8月、301～302頁。

古文書 幕末外國關係文書之七』補遺に収録された「閏七月在清國荷主書翰 唐船主より長崎奉行へ差出、長崎在留唐船主へ清國騒亂の件」からも知られる。

道光三十年、廣東廣西會匪夥、搶兩省接壤之城、始而劫掠民財、繼而拒敵官兵、後竟城池、忽聚忽散、出沒無常、是秋、該匪闖入廣西省之遷江修仁荔浦等縣城、…²⁹

とあるように、長文にわたって太平天国の勢力拡大と上海にまで迫ったことや南京に拠点をもったことなどを詳細に記述している。この情報は、嘉永七年七月二十六日に長崎に入港した在留船主楊少棠、財福陶梅江の寅一番船、翌二十七日に入港した在留船主江星奮と財福程子延の寅二番船³⁰によってもたらされた情報であったことは確かであろう。

安政二年四月には長崎に在留中の貿易船船主の江星奮と楊少棠の両名から長崎奉行に届けられた「清國騒亂」がある、それは日本に漂着した長江口の崇明島の商船から伝えられたものとしての内容である。

唐國騒亂之模様委く相尋候處、昨春北京近く押寄候洪秀全之餘黨、蒙古之精兵等も支、又々散亂致し、所々亂妨におよひ候者誅被致候、…又上海縣之賊徒、昨年中は籠城致し居候得共、次第二勢衰へ候由二付、…小刀會之悪徒、追々官兵二被追放、賊徒ト相成候義ニテ可有之哉。³¹

とあり、長江口付近の商船からの情報であったせいも、太平天国並びに 1853 年 9 月から 1855 年 2 月にかけて上海縣城を占拠していた小刀會についての情報も伝えていることが興味を引く。この時期の小刀會に関する情報は、時間的に小刀會が上海縣城を占拠していた末期の状況を伝えている。

安政二年九月には長崎への貿易船主楊少棠が長崎奉行への上申書としての「清國騒亂の件」においては、上海小刀會のことなども伝えられた。

此節私船渡來二付、當時唐國騒亂ノ模様委細申上候様、…上海之賊類も、既ニ被打平候得共、…南京ハ素ヨリ要害堅固之名城ニ御坐候處、嚴重ニ修理を相加へ堀ヲ浚ひ、地を高め、城外之寄勢不馴之者之入候ハハ、道路之進退を可失程之儀ニテ、固く楯籠り罷在候故、…賊首楊秀清儀、帝王之偽稱致し候依來、自ら大總督之軍務を兼帶し、宗廟を祭り、官宰を設け、或は殿試を行ひ、洪秀全之子を嗣ニ立て、東王と唱へ候…³²

とあり、上海小刀會が平定されたことや、南京を根拠とする太平天国の状況を伝えている。こ

²⁹ 『大日本古文書 幕末外國關係文書之七』補遺、19～20 頁。

³⁰ 『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』17 頁。

³¹ 『大日本古文書 幕末外國關係文書之十一』東京帝国大学、1919 年 3 月、168～169 頁。

³² 『大日本古文書 幕末外國關係文書之十三』東京帝国大学、1920 年 12 月、54～55 頁。

の情報、安政二年八月十一日に長崎に入港した在留船主楊少棠と脇船主顧子英の卯一番船³³が伝えたものであろう。

安政三年二月には長崎在留唐船主の江星奮と楊少棠から長崎奉行に「清國騒亂」の事情が伝えられた。

逆賊は南京城より鎮江迄往來いたし商船を劫して民財を掠候二付、河筋致通行候もの無之、都て四川之産物積廻差支、無據品は峻阻之山路を凌ぎ、運送莫大相懸り候故、諸品拂底にて、殊之外高直二相成、百姓之難儀不過之候處、…³⁴

とあるように、太平天国の勢力が南京、鎮江という長江の水運の重要拠点を占拠しているため商品の流通などにおいて支障が生じていた。これも安政三年二月三日に長崎に入港した在留船主楊少棠と脇船主顧子英の辰二番船³⁵によって中国からもたらされた情報であったと考えられる。

安政三年四月には辰三番船主の楊少棠から長崎奉行へ「清國騒亂」の事情が伝えられたその和訳には、

江蘇省においてハ、南京鎮江兩城之賊黨、未さ根絶不仕候得共、官軍二嚴敷被取圍、賊徒只々孤城困守罷在候、³⁶

とある。この辰二番船とは三月二十四日に長崎に入港した船主楊少棠と財福顔心如の辰三番船³⁷のことである。

安政四年二月に在留中の貿易船主江星奮と楊少棠から「唐國賊亂之模様」が伝えられた。

紅巾之賊亂、道光之末二起り、此節迄數箇年之間、戦戮相加り候儀二付、最早十分之内七八分ハ平定相成申候、³⁸

とある。この情報は安政四年二月十九日の船主程子延、脇在留船主顧子英、財福楊亦樵の巳一番船、二月二十二日に入港した船主顧子英、脇船主程子延の巳二番船、同日入港の在留船主江星奮、脇船主鈕春杉の巳三番船、同日入港の在留船主江星奮、脇船主錢少虎の巳四番船³⁹の四隻から伝えられた中国情報であったと思われる。

長崎へ入港する中国船は、この安政四年二月十九日（1857年3月14）、二十二日（3月17

³³ 『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』17頁。

³⁴ 『大日本古文書 幕末外國關係文書之十三』376頁。

³⁵ 『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』17頁。

³⁶ 『大日本古文書 幕末外國關係文書之十四』東京帝国大学、1922年2月、65頁。

³⁷ 『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』17頁。

³⁸ 『大日本古文書 幕末外國關係文書之十五』東京帝国大学、1922年3月、581頁。

³⁹ 『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』17頁。

日)に入港した四隻以降は安政五年七月二十九日(1858年9月6日)に入港する午一番船⁴⁰までほぼ1年6箇月間途絶えるのである。この間の長崎に来航する中国からの貿易船による中国情報は伝わらなかったのである。

4 小結

幕末の幕閣において、『遐邇貫珍』は重要な外国情報の一であったことは確かであろう。その具体的事例として、上述のように喜多村信節『ききのまにまに』に『遐邇貫珍』が引用されていたことから知られよう。この『ききのまにまに』に抽出された『遐邇貫珍』の太平天国の動向に関する情報は、『遐邇貫珍』の1853年第5号の「近日雑報」に掲載された記事からの抜粋であったことが確認できた。

幕閣に伝わった太平天国に関する情報には、『遐邇貫珍』からのもの以外に、朝鮮国が北京で得た情報が対馬の宗家を通じて幕閣に伝えられたものと、長崎に来航した中国からの貿易船によるものが主要なものであった。特に幕閣が重視していたのは長崎に来航する中国船からの情報であったが、幕閣が期待したほど入手できなかったのは、長崎に来航する貿易船が極端に減少していたからである。その理由は、中国本国の混乱により、日本への基地となっていた浙江省嘉興府平湖縣乍浦鎮への物資の主要な供給地で後背地の重要な経済市場であった蘇州が太平天国軍の攻撃を受けて、対日貿易の機能が瓦解する⁴¹直前であったこととも関係するであろう。

【附記】本稿は、平成17年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)「14世紀～20世紀初頭の東アジア海域諸国における海外情報の研究」(研究代表者：松浦章)による成果の一部である。

⁴⁰ 『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』17頁。

⁴¹ 松浦章「ジャーディン・マセソン商会と日清貿易—文久元年一番ランシフイールト船の来航をめぐって—」『海事史研究』第25号、1975年10月、48～52頁参照。